

白マントと緑帽子の老紳士

辛悦（シンエツ）

（首都師範大学、中国）

要約

A国で今極秘で新型核兵器を開発中。金儲け主義の武器商人アトム・ボムは当初から投資をしていた。あるときこのアトム・ボムに次々と奇怪な出来事が起こる。まずは白い羽のマントとオリーブの枝葉で編んだ緑の帽子の格好で、「あなたはヒロシマをご存知でしょうか？」とだけ尋ねて立ち去る老紳士。次は家で愛犬リトルボーイがくわえていた謎のファイル。そこには「広島原爆の破壊力」というタイトルの長文と、焼け野原や散乱した遺体の写真。さらには某有名レストランでのアジア系ウェイターと江波団子。最後はボム家のホームドクター、リメン・ブランズ先生の精神養子運動に取り組むブランズ一家の話。

ヒロシマ！全てがヒロシマ！

「確かにヒロシマはあなたのせいではない。だがあなたはこの世界のどこかで次のヒロシマを作っている！」

ラジオからとぎれとぎれに、「A国…武器…アトム・ボム氏…行方不明…新型核兵器開発…資金不足…終止…」

プロローグ

A国、深夜、アトム・ボム宅。

首を左右に振ってもがいているアトム・ボムは夢にうなされ、額にじっとり汗をかいた。苦しそうな顔。目覚めた瞬間に体がものすごく硬くなり、呼吸困難になった。ずいぶんたってからやっと落ち着いた。

毎日、夢を見る。見ない時がない。異常なほど夢を見る。

そしていつも同じ夢。楽しい幸せな夢ならいいのに、怖い夢だ。

夜勤明けで昼間に寝ても、やっぱり夢を見る。枕を変えてみたり、いろいろ試したが改善されない。

夢の内容もよく覚えている。死せるがごとく静か、真黒な夢に血の色がついている。広島はどこかにいる自分。原爆が上から落ちてきた…

そう、ヒロシマ。

逃げられない…

シーン1

自由、民主、裕福、強大、北大陸中央部の二大洋に挟まれたA国は全世界の中心。世界トップの先進国として、自国の軍事力にプライドを持っている。

そのA国の国家技術研究本部で今極秘で新型核兵器を開発中という噂でもちきりだ。

「噂なんかじゃない、事実だよ。なぜ私が知ってるのかって？当然だろう、この世界一の武器商人の私なのだから！」と、今篇の主人公、アトム・ボムはワイングラスを指で摩りながらしたり顔に言った。

ぼろい儲けを期待するこのアトム・ボムは軍や政府での広い人脈を利用して、今度の兵器開発当初からすでに投資をしていたのだ。

財富、名声、権利、この世の全てを手に入れた男は、每日一時間をさいて寝室に置かれた姿見の前で自己陶醉する習慣がある。

シーン2

全国商業組合連合会会長として、毎週一回会内中小企業主などの会員と一緒に食事をする事になっている。今日はその日。

資料内の写真から今週の相手はふくよかな二十代の若者だと聞いていた。

午前十一時四十分、一人の男が入ってきた。予定より二十分早い。

横柄な態度で顔を上げたアトム・ボム。その視線の先にはかなり変わった風貌の男が立っていた。

炎暑の七月だというのに、白い羽のマントを羽織り、しかも枝と葉で編んだような緑の帽子をかぶった七十歳ぐらいに見える老紳士。芸術デザインなどの会社の人間だろう、アトム・ボムは頰杖をつけてそう考えた。そういえばあれはオリーブの枝ではないか。

老紳士は何も言わず静かに立っていた。

今日の相手は20代の若者だと言っただけでなかったか。無意識に確認のためデスクに置いた資料に手を伸ばした。ない。資料がない。確かにさっきは置いてあったのに。どうしたというのだ、私は。アトム・ボムは意識がはっきりするように頭を揺らした。

この時、先ほどから黙っていた老紳士が口を開いた。「アトム・ボムさん、あなたは、ヒロシマをご存知でしょうか」。ヒロシマか、聞いたこともないな。だがアトム・ボムはあっさり自分知らないということ認めるタイプではない。「そんなもの、知っていたらどうだっというんだ？」、一貫の傲慢な口調。老紳士は少しも怒った様子もなく頷き、「そうですか。分かりました。では、失礼致します」、ドアを開けて出て行った。

用件はその一言しか？見当がつかない。アトム・ボムは事務室に一人残された。

ならば食事はどうする？

時計が十一時四十三分を指していた。

まあいいか、ランチにしよう。フレンチランドリーか、あるいはジャン ジョルジュ？リバーカフェも悪くないが…

専用エレベーターから出たところで、疾走していくふくよかな後ろ姿を一瞥した。少し見

覚えがあるような気がするが…関係ない。アトム・ボムはキーホルダーを指で回しながら車庫へ向かった。

シーン3

夕方、アトム・ボムさんは家に戻った。

「リトルボーイ、どこにいるの、パパ帰ったよ。」

言い終わらないうちに一頭の大型犬が歓喜しながら飛んできた。アトム・ボムとこの豪邸を共有しているこの子、リトルボーイはロットワイラー、今年三歳。夜もアトム・ボムは自分のとなりにふかふかの布団を一組追加して敷いて一緒に寝ている。その子が今口になにやらファイルをくわえてぐるぐるとアトム・ボムの革靴の周りを回っていた。

布張りソファに身を投げ、アトム・ボムはそのファイルを開けてみた。ファイルのどこにも差出人に関するメッセージがなかったが、アトム・ボムは気にとめなかった。ファイルの中には数枚の資料が入っていた。紙いっぱい黒字がびっしりと印刷してある。タイトルは「広島原爆の破壊力」。手当たり次第めくって目を通してみるが、隙間なく埋め尽くされている奥深い文字を真面目に読む根気も興味もない。ただ商人としては中の数字部分には多少敏感に反応する。「約50キログラムのウラン235」「エネルギー…約63兆ジュール…火薬換算で15キロトン」「爆風速は440m/s以上」「暴風エネルギーの1000倍」「350万パスカル」「地表温度は3000-6000℃」「黒い雨が1時間以上強く降り」。ある一枚の写真はあたり一面見渡せる焼け野原、半壊の防空壕や焼トタンで囲んだ小屋、そして散乱していた身元のわからない遺体。写真の裏には「ヒロシマ 1945年8月6日」と書いてある。

これがヒロシマか。アトム・ボムは昼間会った老紳士のことを思い出した。目的なんかわからないが、アトム・ボムはネットで探そうとした。世界最初の被爆地か…やあこれは悲惨だね、としか感想もない。でも私と関係ある？PCの電源を切って寝よう。

寝込んだアトム・ボムの側で、リトルボーイの目が暗闇にざらりと光った。

シーン4

数日後、アトム・ボムは政府要人のグリーディー氏と名店シェフズテーブルでディナーを共にする予定だ。

グリーディー氏は例によって遅刻だ。待つことが嫌いなアトム・ボムがつまらなそうに携帯でニュースなどを見ていると、ウェーターが前菜ではなくデザートを出してくれた。

毎週変更されるディナーメニューがこの店の一つの魅力だから、料理を運ぶ正式順序に従ってなくてもアトム・ボムはおかしいとは思わない。

滑らかな木質皿にうぐいす色の団子が二つ並べてある。傍に侍立しているウェーターが懇ろに紹介してくれた。「この一品は日本伝統の和菓子の代表、江波団子でございます。」さすが名店シェフズテーブルだね、南米系レストランなのに日本料理もできるのか。アトム・ボムは深く感心しながら団子を一塊口に入れた。

匂いは草もちそのもの。餡も入っていない、なんの甘みもない。もっさりとした食感。

嫌々ながら飲み込んだアトム・ボムは風格を失わないようにむりに笑って堪え、これを下げるとウェーターに目配せして知らせた。だがウェーターは謎めいた笑みで話した。

「ヒロシマ原爆の後は、食糧の配給は滞りがちで、飢餓状態に陥った人々はこの江波団子とよばれた鉄道草やホンダワラを混ぜた団子のような代用食を、ただ空腹をしのぐためだけに食べていたそうです。おいしいですか。」

ヒロシマ、またヒロシマ！

アトム・ボムは一瞬体に電流が流れて衝撃を受けたようになり、少し怯えた眼差しでウェーターを見つめていた。彼はなかなか若いし、アジア系の顔をしている。その謎めいた笑顔の前に、どうしてかわからないが、アトム・ボムは言葉を失っていた。重苦しい沈黙のあと、ウェーターは手早く皿を片付け、アトム・ボムに向かって恭しくお辞儀をし、「なにか貴方様の心に響くものはございませんか。では、失礼致します」、ドアを開けて出て行った。

一瞬面食らったが、我に返るとどうにも怒りがおさまらない。アトム・ボムはホールマネージャーを呼んで怒鳴りつけた。そのウェーターについての特徴を聞いたマネージャーは、この店にはアジアンウェーターはいないと断固として否認した。威圧的で一步も引かないアトム・ボムの手前、マネージャーはしかたなく店員に調査を命じた。その結果、冷蔵庫の傍で折りたたんだ彼の制服が見つかった。制服の上には一本のオリーブの枝が置かれていた…

シーン5

団子事件の日から、アトム・ボムは極めて大変な立場に追い込まれた。世界中で一番忠実な友のように毎晩悪夢に訪ねて来られた。睡眠不足からくる神経衰弱に苦しめられたアトム・ボムは絶望の淵に沈んだ——自分はヒロシマに縛られてしまった。

確かに、私は武器商人をやっている。だから何だというのだ？到底ヒロシマに対して原爆を投下したのは私ではないじゃないか。そもそも戦争は武器商人が挑発したのではなく、疑心暗鬼に陥っている世界の為政者達が平和と自由と正義を錦の御旗としながら実際は自国利益のためにとった世界的な措置なのだ。そして、商人である以上、あらゆる手段を使ってお金を稼ぐことが心得。武器商人だって商人の一種だろう。なにが悪い？

こう分析すれば、自分が完全に無辜の人だと判断できる。

でもいまさら弁解してもはじまらない。悪夢は理解してくれない——毎晩やってくる。

一週間という僅かな期間だったが、アトム・ボムは顔が以前よりずっとやつれてしまった。毎日慣例の自己陶醉さえもやる気にならなかった。リトルボーイも最近気持ちが乱れているようだ。アトム・ボムさんが近づくと、舌の色が変わるくらいに興奮し、引っ張り暴れて、むせかえるくらい吠える。

その日、ボム家に一人のお客様が来た。リメン・ブランス先生はボム家のホームドクターとして四十年以上働いてきたし、アトム・ボムの数少ない友達の一人なのだ。リメン・ブランス先生は数日前に旅行から帰ってきたらしい。だから旅はどうだった、とアトム・ボムは自然に聞いた。六十八歳のリメン・ブランス先生はまるで子供のように興奮した様子で答え

た。「素晴らしかったよ！弟と出会えたから！」記憶の中ではブランス先生も奥さんも一人っ子だが、いつの間にか弟がいるのか。「日本の弟だよ、広島での。」

ヒロシマ！

アトム・ボムは意外にもあまり驚きがなかった。ハア、やはり来た、と一種の慣れた感じ。

「精神養子運動は聞いたことがある？広島原爆事件が子供達の親を奪っただろう。その子達にA国の市民が愛の手を差し伸べ、精神親になった運動のことだよ。海の向こうに義母が精神養子縁組を結んだアキラ君がいる。彼はブランス家の一員、私の弟だ」と、きっぱりとした口調で言った。

「1951年に亡くなった義母カインドに代わって、妻のケアがアキラ君を励まし続けてきたんだが、その妻も心臓病で亡くなった。それで私が彼の兄に…うちの三男ホープも『アキラ君はうちの家族』と言ってくれたんだよ。この何十年で、2代にわたり3人が受け継いできて、そして交流は4人目に引き継がれようとしているのがうれしいよ。」アトム・ボムは上の空で聞いていた。

突然話が変わった。「噂の新型核兵器開発、あなたが投資人？」とリメン・ブランス先生は厳粛に聞いた。アトム・ボムさんは不敵な笑みを浮かべながら頷いた。「これ、絶対いいチャンスだ。さすが核の時代だけに、開発できたら各国が我先に買い付けにくることは間違いない。私はこんな世界どうでもいい。争いたいなら争えばいい、私のものが売ればいいのさ。もっと、もっと！高値でね！」

「あなたは本当に、広島を訪ねに行くべきだ。辛く厳しい境遇の中で被爆者の怒りや憎しみ、悲しみなど様々な感情と、若い世代に将来二度とこのような残酷な目にあわせてはならないという考え。確かにヒロシマはあなたのせいではない。だがあなたはこの世界のどこかで次のヒロシマを作っている、その手で！」

リメン・ブランス先生の目には失望が満ち溢れている、荒れた海面のような、割れた鏡のような。彼の後ろに、何枚の羽が舞い落ちてくる。純白の羽。

アトム・ボムに忍び寄り、よだれを垂らしながら、牙を剥き出しながら、リトルボーイは目をぎらつかせた。

一瞬、アトム・ボムの声にならない悲鳴。あたりに濃い血の匂いが漂った。

そして、静寂。

エピローグ

「A国…有名…武器…アトム・ボム氏…行方不明…犬…致死…疑い…新型核兵器開発…資金不足…終止…」あたりはひっそりと静まりかえり、ラジオからの声のとぎれとぎれに聞こえてくるだけだ。

老紳士は相変わらず白い羽のマントと枝葉で編んだ緑帽子の格好。

A国の空に、また、遥かな海の向こうに、グラスを高々と掲げ。

もう70年ⁱになったね。

2020年ⁱⁱまでは、遠くなくなった。

これをプレゼント。ヒロシマに。
ふわりと風に白いマントをぱっとはためかせた。
青空へ、白いハトが一斉飛び立った。

■参考文献

1. 広島市平和宣言（平成26年、25年、24年、23年、17年、16年）
2. ヒロシマ精神養子 第2部 今も「わが子」気遣う米国の親
http://www.hiroshimapeacemedia.jp/mediacenter/article.php?story=20091210161403531_ja
3. 広島の復興 <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/Peace/J/pHiroshimaTop.html>

ⁱ 広島市の被爆70周年

ⁱⁱ 被爆後75年目に当る2020年までに地球上から全ての核兵器を廃絶する(平成16年の平和宣言)